普段着のわたしたち

実家のおたぬきさんに母が『鬼滅の刃』の炭治郎マスクをつけました。

前の通りは通学路になっているので、毎朝毎夕子どもたちが眺めて笑って触っているらしいです。

時々、折り紙で作った花が徳利の口に入れてあることもあるそうで、とても微笑ましいのだとか。

お地蔵さま代わりのおたぬきさんです。

ちなみに、このマスクを縫ったのは私ですけど。

訶梨帝母

１月、ポンペオ元アメリカ国務長官が「置き土産」に、中国共産党におけるウイグル人弾圧を国際法上犯罪となる「ジェノサイド」と断定して政権を去りました。現長官もそれを引き継ぐと表明しました。

ちょうど同じ時に発売された本です。漫画家清水ともみさんが身の危険を感じつつ書き上げた本です。たいへん重く辛い本ですが、主が漫画作品になっていますので理解しやすいと思います。私は今まで人に本の紹介などしたことありませんが、今回だけはそうしたいと思います。

俊徳丸

ファイトーいっぱーつ、でおなじみのリポビタンD。それのゼリーがありました。思わず買ってしまいました。

味もそのまんまリポビタンDです。

美味しいですね。ちゃんと効き目もありました。元気になりました。

たまの栄養補給は必要ですね。

征阿

バレンタインデーにユニークなプレゼントをいただきました。有機黒にんにくです。原材料に有機栽培の岐阜県産にんにくを使用し、発酵・熟成させたもので、１日に１～３粒食べると良い健康食品。甘～いし、嫌な臭いもしません。

がん抑制食品として、にんにくは最高。

昔、修行僧にはご法度とされたパワー食材の「五葷（ごくん）」、にんにく、にら、らっきょう、あさつき、ねぎ。お寺の門前に「不許葷酒入山門」（葷酒（くんしゅ）山門に入るを許さず）の石柱をご覧になったら、読み方を変えましょう。酒は許さずとも葷は山門に入る。

迷走ボー

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/　「友引町内会通信」をクリックしてください。

寺務局

アニメ『鬼滅の刃』が子らの間で大人気。昨年秋に公開となった劇場版は歴代興行収入一位。あの『千と千尋の神隠し』（二位）、『タイタニック』（三位）を越えたですって？　息子が見たいと言っているし、いかほどのモノか拝見いたしましょう、と何の予習もなく映画館へ。結果、年甲斐もなく私がどっぷりハマりました。

『鬼滅の刃』は「週刊少年ジャンプ」で二〇一六年から連載が始まった漫画作品。単行本は全23巻で、昨年末、その最終巻を買い求める人が行列をなしたとニュースにもなっていました。たかが漫画、コロナ禍に行列なんて、と苦々しい思いで傍観していましたが、この度全23巻一気に購入いたしました（現在はネットで買えます）。漫画を買うなんて何十年ぶりでしょう。届いた日は息子が「ママ読みたいんでしょ。どうぞ、お先に」と譲ってくれました。無言の圧を息子は感じたのかもしれません。大人げない・・・。ママ反省。

さて考察。興行収入一位になった原因は何か？　『千と千尋』のようなファンタジー感はなく、『タイタニック』ような計算し尽くされた映像の美しさや壮大感もありません。この二作を越えたのは昨今ＳＮＳ発信による様々な仕掛けや扇動。同じ土俵に上げたら一位にはならないのでは、という思いは否めません。が、それを差し引いても面白さは太鼓判。

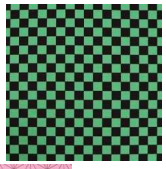
こもりうた74

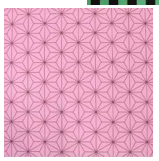
内容は、人間vs人喰い鬼。悪鬼滅殺の為に肉体を極限まで鍛え上げた人間達（鬼殺隊員）の剣劇。『里見八犬伝』を彷彿させます。主人公炭治郎がこの上なく優しい少年で、「殺された人達の無念を晴らす為、これ以上被害者を出さない為、容赦なく鬼の頸に刃を振るいます。だけど鬼であることに苦しみ自らの行いを悔いる者を踏みつけにはしない」と鬼の事情？を毎回受け止め、成佛してください、と祈る姿勢が好ましく、特に彼の技の中で「水の呼吸、伍ノ型、干天の慈雨」は、痛みも苦しみもなく優しい雨にうたれる様に穏やかな死を迎えられる慈悲の剣撃。血みどろ漫画ですが、心安まる場面多数有り。

時代設定は大正期。詰襟に羽織という隊服。羽織の柄が

市松模様

麻の葉





毘沙門亀甲などなど。

こんな古典柄が今の子供達に認識されるのも和装好きの私の推しどころ。

目下のところ、母子でハマり込み、息子が悪さをすると「全集中！水の呼吸、拾ノ型、生々流転」と斬りつけ、「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃」と反撃を受け、チャンバラごっこを楽しんでいます。漢字、四字熟語、旧字（壱弐参肆伍陸漆捌玖拾）がふんだんに使われ、七歳児には少々悩ましいところですが。

総じて、いとおもしろき哉。

訶梨帝母

ひょっとするとチャンスかも

東京オリンピック・パラリンピック組織委員会を巡る一連の騒動は日本社会の縮図。女性差別問題を「お前はどう考えるのか」と自問してみました。

言葉はよく選んで使うべし。『大漢語林』で女偏の漢字を引いてみると、失礼な字があるわ、あるわ！

未婚女性は「娘（むすめ）」と書きます。良い女です。まあ文句はありません。

結婚すると「嫁（よめ）」と呼び方が変わります。最近は、夫の家に入らないで二人でマンション暮らしというのが主流ですけど。

息子が嫁をもらうと「姑（しゅうとめ）」。まだ充分若くても古い女。しかも亭主は「嫝（かかあ）」と言い始める。鼻についた女。

夫に先立たれると「未亡人（みぼうじん）」。未だ亡くならざる人。早く死ねと言いたいのか。

遂には「婆（ばばあ）」。女を波の下に沈める？

（そんな事したら衝突されませんか、自衛隊の潜水艦に）

さらに酷いのが、「妓（あらそう）」女＋女。二人の女が同居して言い争うの意味を表す。

「姦（かしましい）」いつ頃から誰が言い始めたのでしょう、女三人寄ればかしましいなどと。

（「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかります」と言ったのが炎上の発端では）

まだまだ、奴・奸・姤・妨・嫉・嫌・妄・妖・妾・姪・婪・媮・媸・嫚・・・。

漢字を創ったのは古代中国の男たちです。ジェンダーギャップの世界水準が解ってきた今こそ、みんなで「かんじ悪い」漢字を創り直してみてはどうでしょう。

佛教界には漢字の専門家が大勢います。お寺の奥さんたちの会合があって、看板に大書してありました「寺庭婦人会（じていふじんかい）」と。

「婦」は女＋帚（ほうき）。お寺の女は帚もって庭でも掃（は）いとけ、という会なのでしょうか。

戒名をご覧になると漢字ばかりが並んでいるでしょう。戒名をお授けする際には、菩薩に相応しい、良い意味の字を選びます。絶対に不吉な字は付けません。（時には、付けてみたい誘惑にかられる人がいますけど）

在家の方でも漢文に造詣の深い人が佛教経典を読めば、「女性蔑視だ」と突っ込みどころ満載です。けれども、大乗佛教の根本精神は、みんな一緒、みんな平等です。

もう直ぐお彼岸です。迷い多き娑婆「此岸（しがん）」から佛の覚りの世界である「彼岸（ひがん）」へ到る。その心を『般若心経』の最後の真言から読み取れます。「羯諦（ぎゃてい）羯諦（ぎゃてい）波羅（はら）羯諦（ぎゃてい）波羅僧羯諦（はらそうぎゃてい）菩提薩婆訶（ぼじそわか）」

「行こう　行こう　彼の岸へ行こう　彼の岸へみんなで行こう　覚りに幸いあれ」

お坊さんは男性も女性もお経のプロです。なぜ女性だけ「尼」（アマ）のままなのか。

看護婦さんは男性も女性も看護師さんと呼称が統一されました。お坊さんを性で別けないで、これからはみんな「和尚さん」と呼んでいただければ嬉しいです。

迷走ボー

旗の存在

檀家さんでの午前中のお参りが終わり車で帰寺の途中に「回転寿司」の前をよく通ります。なにせ岐阜県は海無し県で人口に対する寿司店の数を山梨県と共に競っているほど多い。今日も休日のお昼時、「スシロー」の前の交差点で信号待ちとなりました。

コロナ禍でも駐車場は満車状態です。一台の車から家族がぞろぞろ降りてきました。小学生らしき次男は自然体で楽しそう。中学生らしきお兄ちゃんはスマホを見ながらめんどくさそうに歩いています。いつもは親と行動を共にしていないのですが回転寿司の魅力に負けたという感じ。そして、お祖母ちゃんはというと…！普段は少し腰を曲げて歩いているのでしょうが、この時ばかりはと背筋を伸ばし、胸を張り入口の一点を見つめて、「私しゃこれから、お寿司を食べに行くのだよ！」と堂々と歩いておられます。まるで観閲式で行進する自衛隊さんのように威厳さ誇らしさを感じます。以前、中国の王毅に何も言い返せなかった体たらくな茂木大臣には見習ってほしいほどの立ち振る舞いです。車からお店入口に至るわずか数 10 トールの距離の間に個々の喜びが表現されます。確かに、いくらお寿司が一皿百円の時代とはいえ、海の憧れが宿る岐阜県人にしてみれば、お寿司を食べにお店へ行くという行為はやはり「ハレ」の日なのです。では何故、私も含め年配者は茂木大臣にも手本を示すほどの凛々しい態度を「ハレ」の日に示すのでしょうか。

以前、それについて考えたことがあります。「お子様ランチ」の「旗」。私の幼少の頃、「お子様ランチ」は確かに「ハレの日」の食べ物でした。たまに連れて行ってもらえる百貨店の食堂で食べたものです。山型のケチャップライスの頂上には「旗」が凛々しく立っていました。今日は「ケの日」ではなく「ハレの日」だと一線を引いてくれるのが「旗」の存在でした。現在の豊かな食生活には「ハレの日」が薄れてしまっているのでしょう。

同じくして、最近祝日に「国旗」を玄関に出す家庭がほとんどありません。現在の日本人は国旗に対する思いが他の国より薄いそうです。たぶん全国で祝日の日本国旗よりイタリアンレストランに掲げられているイタリア国旗の方が多いことでしょう。私も最近知ったのですが、イタリアンレストランの店先にイタリアの国旗が立ててあることが外国から来た観光客にはとても不思議な光景だそうです。これは「日本の常識、世界の非常識」的な行為で、国内で他国の国旗をむやみに掲げると国によっては法律にふれ厳格に処罰されることもあるそうです。それをして逮捕された日本人がいるそうです。それくらい国旗には敬意をはらわないといけません。

ちなみに、私は住職として毎朝厳粛に本堂正面で国旗と佛旗の掲揚をしています。俊徳丸

『私説法然伝』（７４）

法然がくる①

先月号では往生する人たちということで、重衡の往生、そして法然上人の往生という事を書きました。今月号はその続きについて書きます。

【顕真法印という僧がいた。天台座主となる程の僧であった。迷いの世界を離れ、悟りを求めてひたすら比叡山延暦寺で勉学と修行に励み、四十三歳で全ての官職を辞め大原で隠遁し、ひたすら「救い」を探し求めていた僧である。法然上人より二歳ほど年上ではあるが、法然上人とほぼ同年代である。法然上人の噂を同門の永弁法印から聞いた顕真法印は、早速法然上人にお会いしたいと伝えられ、法然上人とお会いになられたと伝記にある。その場で顕真法印は法然上人に対して「どうすれば迷いの世界を離れる事ができるのか？」とストレートパンチを放った。この質問はストレートパンチとしか言いようがないものである。法然上人も流石に「あなたのお考えに勝るものはありません」と答えられている。流石に法然上人と言えども初対面で名のある只者では無い僧からストレートパンチを食らうとは思いもしなかっただろうか？

顕真法印は法然上人に「あなたが思うところを教えて欲しい」とさらなるストレートパンチを放った。ここで法然上人もまたストレートパンチで答える。法然上人はあくまで本願念佛によって救われる。佛の「願力」によって我々は誰でも簡単に往生できるのです、と答えたのだ。両雄の初会談はそれで終わったとある。その後顕真法印は法然上人を評して「偏りがある」と人に語ったという。その事を聞いた法然上人は「自分が知らない事に関しては疑いの心が起こるものだ」と仰られたという。その言葉を聞いた顕真法印は納得されて、浄土佛教を学問的に一から勉強されたという。そしてまた再び法然上人と会談したいと願われたのである。

文治二年（一一八六年）大原勝林院にて後に「大原問答」と言われる法然上人への公開討論会が開催された。参加者は多数の僧たちである。主催者である顕真法印を始めとする比叡山延暦寺の学僧に大原の聖たち、三論宗の明遍や、法相宗の貞慶などの姿もあった。法然上人は数名の供と、顕真法印のように迷いからの解脱を望んでいた東大寺大勧進の重源を誘い招いている。法然上人にとっては初の公の場で自らの見解を述べる事になるのである】

以下次号に続く（征阿）

大原勝林院本堂

続・観経物語（２１）

観経要讃⑳

読誦大乗上品上
惑読不読上中品
深信因果上下品

この三品は行福ぞ

観経のお話も今回から後半に入ります。前半は韋提希夫人が極楽浄土に生まれんことを願い「われに思惟を教え、われに正受を教えたまえ」という請に対する答えとして、精神を集中し統一して禅定に入り、観想・観法する十三の方法で説かれました。これをまとめて定善とよび、これができる修行者は定善の機と言います。この機に対して後半は、心・精神が散心にして統一が不可能な凡夫に、悪を廃め善を修して浄土に往生させる散善を説いていきます。

しかもこの散善は韋提希夫人が思惟正受を請するその前に、釈尊が自らお説きになり自開なされた、菩薩の浄土往生の三福の行の深い思慮をもとに説き明かされたものです。前の三福とはどんな浄き行いであったのか。

一には父母に孝養、師や目上の人に仕え、慈心をもって殺生せず（世福）

二には、三宝に帰依し、戒律を守り、威儀を正しくする（戒福）

三には菩提心を起こし、深く因果の道理を信じ、大乗の経典を読誦し、人をすすめて佛道に導く（行福）

この三福の人を後半では、至誠心・深心・廻向発願心の三心を得た上での往生を願う行いの区別によって人を分けて、上品・中品・下品の三輩とした上で、各品を、さらに上生・中生・下生の三種に分けて、合わせて三輩九品の散善の人＝機としました。そして、この散善の機の具体的な行の内容を、上品の上生の機から順番に当てはめて釈尊は説いていかれるのです。

観経では「復た三種の衆生あり～一には、慈心にして殺さず（行福）、諸もろの戒行を具う（戒福）。二には大乗の経典を読誦す（読誦大乗＝行福）。三には、六念を修し、廻向発願して彼の国に生まれんことを願う（世福）」と上品上生の人の説明があって、次の上品中生の段では「～必ずしも方等経典を～読誦せざれども～～深く因果を信じ、大乗を謗らず～（惑読不読＝行福）」とあり、さらに上品下生の段では「上品下生とは、亦因果を信じ、大乗を謗らざるも、但無上の心を発すのみ。（深信因果＝行福）」とあって、この上輩の上品上生から上品下生章では、三福のうち、大乗の行福を専ら修める人であることがわかります。この上品の三段の、いわゆる往生をする機を前半に説かれた三福の、大乗の上善・次善・下善の機と捉え、簡略にまとめあげたのが、関本諦承師の観経要讃⑳です。《妙星斎》